

## 新任教職員に期待するもの

奈良県教育委員会  
教育長 吉田育弘

### 1 はじめに

こんにちは。奈良県の公立学校の教職員として新たに採用されました皆さん、心からお祝い申し上げます。本日、新たに350名の皆さんを私の後輩としてお迎えすることができ、大変うれしく思います。「教職員になれた。」という大きな喜びと、子どもたちの教育という重責を担う責任感や緊張感を忘れないでください。その第一歩が今日から始まります。子どもたちが安全に安心して、そして健やかに成長できるように、教職員としての職務を意識して毎日を過ごしていただくよう、お願いします。

### 2 ESDについて

令和の時代に入って初めての冬は大変暖かかったですね。世界的に見てもその傾向は顕著だったようで、アメリカ（米国海洋大気局）の発表によると、今年の1月の気温は20世紀の平均から1.14℃上がり、信頼できるデータが存在する過去141年の観測記録において、最も気温の高い1月になったそうです。

最近では日本でもゲリラ豪雨や記録的な猛暑など、異常気象が頻繁に起こるようになりました。世界的にも地球温暖化や自然環境の破壊など地球規模の様々な課題が増大してきています。

昨年12月にスウェーデンの16歳の環境活動家、グレタ・トゥーンベリさんがアメリカの『タイム』誌による2019年「パーソン・オブ・ザ・イヤー（今年の人）」に選ばれました。グレタさんは2018年に「未来のための金曜日」として、環境保護を訴えるために、毎週金曜日に学校ストライキを始めました。その後、スウェーデンの国会議事堂前で2週間のストライキを行い、政府に年間15%の炭素排出量の削減を求めました。

グレタさんの活動は急激に世界に広まりを見せ、たった一人の活動が、わずか1年後には、161か国約400万人が抗議活動に参加し、史上最大の気候デモが行われました。さらに、グレタさんは国連気候行動サミットで世界の指導者たちに向け、切々と、「大絶滅を前にしているというのに、あなたたちはお金のことと、経済発展がいつまでも続くというおとぎ話ばかりしています。」「こんなことは間違っています。私がいるべき場所はどこではないのです。わたしは海の向こうにある、学校にいないべきではないのです。」と涙ながらに訴えたのです。グレタさんは8歳のときからこの問題について、考え続けているそうです。

グレタさんの抗議活動についての是非はいろいろあるかと思いますが、私たちは誰だって、多かれ少なかれ、気候変動や温暖化の問題には関心はあるし、不安もあります。しかし、目先の仕事や生活を言い訳にして、それをないもののように考えたり、忘れたりしているのが常ではないでしょうか。

それでは、私たち教職員が今できることはなんなのでしょうか。みなさんはESDという言葉を知ったことがあると思います。ESDは、Education for Sustainable Developmentの略で「持続可能な開発のための教育」と訳されています。ESDとは、地球上にいるすべての生物が、遠い未来

までその営みを続けていくために、これらの課題を自らの問題として捉え、一人ひとりが自分ができることを考え、実践していくことを身に付け、課題解決につながる価値観や行動を生み出し、持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動の事です。簡単に言うと、ESDは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育です。

新学習指導要領にも、前文や総則において、「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられており、各教科においても、関連する内容が盛り込まれています。

このような地球規模の課題が年々深刻化していく厳しい世界に生きている子どもたちに対しては、知識を一方向的に教え込むだけの教育を続けていても課題解決に必要な力を十分に育成することはできません。子どもたちが主体となる場面を設けることが大切です。ESDは、知識・技能の習得に加えて、現代社会の課題を自らのものとして捉える能力や態度が重要です。子どもたちが自ら課題を設定するプロセスの中で、何が大切で、何が課題なのかを考え、様々な意見に触れることが重要です。更に、グループ活動を重視して協働的に実践していくことも必要です。他人事ではなく自分事として、ぜひみなさん自身で、学校、子ども、地域の実態などを踏まえて、ESDをデザインして行ってほしいと思います。

### 3 Society5.0とこれからの教育について

令和の時代に入り、政府は全国の小中学校のすべての児童・生徒が「1人1台」の状況でパソコンやタブレット型端末を使える環境を令和5年度までに整備するための政策を打ち出しました。奈良県でもその整備に向けた準備が着々と進んでいます。いよいよSociety5.0の社会がやってくるのが現実味を帯びてきています。

Society5.0というのは、人間社会のバージョンを表した言葉の事です。バージョン1.0は狩猟社会、狩りをしてきた時代です。バージョン2.0が農耕社会、農業で発展した社会です。それからバージョン3.0は、産業革命が起こり、工業が発展した社会です。バージョン4.0は情報社会と言われる社会ですが、これからバージョンが5.0の、超スマート社会になると言われています。この超スマート社会を実現する、そのベースになるのはいわゆるAIです。人工知能の発展です。この人工知能によって社会が大きく変化する、そんな時代に入っています。

私は趣味で囲碁を打ちます。囲碁は今や、ネットで相手が誰か分からなくてもゲームを楽しむことができるようになってきました。この囲碁という世界では、絶対にAIが人間を超えることができないと言われていましたが、囲碁の世界であっても、世界のトップがAIのソフトに敗れました。囲碁というものは盤面の中に、どのような世界を構築するのかと、自分で考えて碁を打つことが重要で、打ち手は無限にあります。そのため、なかなかAIのソフトでは勝てるまではいかないだろうと言われていました。けれども、そんな囲碁の世界であってもAIは人間を凌駕したのです。囲碁で敗れた世界チャンピオンはプロ棋士を引退しました。その理由の一つに囲碁AIの圧倒的な強さを挙げているそうです。

また、今年の7月24日から東京オリンピック・パラリンピックが開催される予定ですが、選手村では、移動手段として自動運転の電気自動車が走るそうです。ほかにも、入場者を管理するための顔認証技術や体操競技における採点では自動採点支援システムが導入されるそうです。ただ、AIは、あくまでも計算機で、文脈や意味を理解しているわけではないので、うまく使えば

素晴らしい力を発揮しますが、結局課題を与えたり、解決すべき課題を見つけたりするのは人間にしかできないのです。

未来には、AIに現在ある職業の多くが奪われると言われていています。しかし教育の分野に関する職業は未来も残ると言われています。どんなにAIやロボットが進化したとしても、人の心に寄り添ったり、人を育てたりすることは人間にしかできないのです。教育の分野に携わる我々が、今後子どもを育てていくときには、このAIを正しく活用できるような子どもに育てていかなければならないのです。そして、私たちは、このAIというものについて、何ができるのか、また何ができないのかということを知っておかなければなりません。

私は、AIが到達できない領域の一つに、何かを好きになるということがあると思います。AIは絶対何かを好きになるということはありません。人がデータを与えて処理をするだけです。だから何かを好きになるということ、やはり教育の中で大事にしていく必要があるのではないかと思います。何かを好きになるという気持ちがあれば、当然何かに夢中になるという行動として、子どもたちに表れていくでしょう。好きという気持ちが、夢や志をもつことやチャレンジすることにつながる原動力になります。好きだから夢中になるという行動になるのです。

#### 4 子どもの心に火を付ける

有名な教育学者ウィリアム・アーサー・ウォードの言葉にこんな言葉があります。「平凡な教師は言って聞かせるだけ、よい教師は説明ができる、優秀な教師は自らそれをやってみせる、最高の教師は子どもの心に火を付ける」皆さんも子どもの心に火を付ける、そんな教職員になってほしいと思います。

「化学は面白いよ」「物が化けるから『化学』なんですよ」小学校3年生のときの担任の先生が楽しそうに話してくださった。昨年ノーベル化学賞を受賞された吉野彰さんが、子ども時代を振り返って言われた言葉です。その先生は皆さんと同じ新任の先生だったそうです。新任の先生の何気ない一言が子どもの心に火を付けたのです。ぜひみなさんも子どもたちに今まで経験してきたいろいろなことを語ってあげてください。そして、素晴らしい子どもたちを育ててもらいたいと思います。もちろん、子どもの心に火を付けるのは、担任をしたり、授業を担当したりする教員だけではなく、事務職員、養護教諭、栄養教諭、実習助手の皆さんも、それぞれの場所で、それぞれの専門性を生かして、子どもたちと積極的に関わっていただくことが子どもの心に火を付ける学校づくりにつながるのです。

さて、新学習指導要領が小学校では今年度からいよいよ全面実施されます。新学習指導要領について話をするとき、よく主体的・対話的で深い学びという言葉が出てきます。今までいろいろな主体的・対話的で深い学びの実践を研修したり、見たりしてきましたが、どうも対話的ということだけが表に出て、子ども同士でおしゃべりをさせることがよいという風潮が見られるような気がします。子ども同士が対話をして、子ども同士で何かを見付ける、つまり、子どもが主体的にもの考えるということが抜けてしまっているのです。対話をさせれば、主体的・対話的で深い学びにつながっていく。要するにグループディスカッションをすれば、それが主体的・対話的で深い学びなのだということに誤解している人がたくさんいます。主体的・対話的で深い学びの一つの手段としてグループディスカッションがあるのに、グループディスカッションへの取

組自体が目的になってしまっているのです。まずは、子ども自らが主体的に考えなければなりません。そして、考えたことを表現して、議論を深めていかなければならないのです。これがさらに深い学びにつながっていくこととなります。そういった学びが子どもの心に火を付けるのです。だから、このような主体的・対話的で深い学びについてももしっかり研修していただく必要があると思います。そして、皆さんには、それぞれの場所で専門性を生かし、子どもが何を考えているかということを想像して、主体的・対話的で深い学びを実践していただきたいと思います。まずは、自らが学ぶことから始めてください。教職員自らが学ぶ姿勢をもってください。いくら知識やスキルを身に付けていても、学ぶ心や学ぶ姿勢を持っていないと、当然子どもは見透かします。子どもは先生の後ろ姿をよく見ていて、先生の後ろ姿で子どもは教わるのです。ですから、子どもの心に火をつけられる教職員になるために一番大事な力は学び続ける力です。自分自身がしっかり学び続けるという姿勢をもって、教職員として成長して行ってください。

## 5 魅力的な教職員になるために

学び続ける教職員を支援するために、奈良県では教育研究所、奈良市では教育センターを中心に教職員を支援する体制を整えています。教育研究所や教育センターというところは、皆さんの初任者研修の校外研修を実施するところですが、皆さんを支援する場でもあります。これから研修に行く機会がたくさん出てくると思いますので、大いに活用してもらいたいと思います。ほかに、未来の小学校教員の養成も奈良県では取り組んでいます。これは次世代教員養成塾と言います。高校2年生から、小学校の教員になりたい生徒を集め、小学校の免許状を取得できる大学に協力いただき、月1回程度授業をしていただいています。優秀な小学校の教員を育成するために、奈良県ではこのようなことも行っています。

先程、子どもの心に火をつけられる教職員になるためには、一番大事な力は学び続ける力であると言いました。もう一つ大事な力はコミュニケーション能力だと思います。いくら知識をもっていても、いくら他人より優れた技術をもっていても、相手に対してうまく伝えたり、教えたりできなければ教職員としてはうまくやっていきません。その中でも大切な力は聞く力です。伝える技術は経験や研修を重ねるうちに上達していくと思いますが、相手の話をよく聞いて、素直に、そして謙虚に受け止めて次のコミュニケーションや自身の成長につなげる姿勢を大切にしてください。話し上手は聞き上手ということわざがあります。人の話をしっかり聞ける人ほど魅力的な話ができる、人の心に火を付ける人物となるのです。また、知識や情報も常にアップデートすることで様々なコミュニケーションが可能になります。常にアンテナを広く張り、様々な情報を受け取れるようにしてほしいと思います。

## 6 辞令書・宣誓書について

辞令書について、皆さんに少しお話をしたいと思います。辞令書の一番上には、「あなたをここに採用する」と書いています。県立学校に着任される皆さんは、県に採用された県の職員です。市町村立学校に着任される皆さんは、その市町村で採用された市町村の職員と認識してください。ただ、市町村で採用された皆さんも県費負担教職員ですので、給料は全て県でお支払いします。服務監督は市町村の教育委員会です。県の教育委員会は皆さんの任命権をもっていません。任命権

というのは採用する、退職する、処分するなどの権限をもっているということです。それから先ほど、サービスの宣誓をしていただきました。サービスの宣誓は、県民に対して行っています。ですから皆さんは公の立場としての公務員となるわけです。公の立場で皆さんは今後生活していくわけですから、当然公平でなければならないし、子どもの信頼を損なうようなことは絶対できません。県民に誓うということは、子どもに誓っていることだと思ってください。

ただ、残念ながら毎年奈良県でも教員の中には不祥事を起こす人がいます。不祥事を起こしたら、本人が自分の一生を棒に振るだけでなく、その学校の子どもたち、先生方に大変大きな迷惑がかかります。だから奈良県にいる先生が誰一人として不祥事を起こさないということを、私は絶えず願っています。

## 7 おわりに

吉野山の金峯山寺で修行をされ、吉野、金峯山寺1300年の歴史で2人目となる大峯千日回峰行満行（金峯山寺の蔵王堂から山上ヶ岳頂上にある大峯山寺まで往復48kmを1日16時間かけて歩き、それを1000日間続ける修行）を果たされた塩沼亮潤しおぬみりょうじゆんさんは、日本の教師に求めるものは何かと聞かれ、「人間力を高めてほしい。」と答えられました。子どもたちは先生のことをよく見えています。全校朝会や学年集会などで、体育館に子どもが集まって、ワーワー言っているときに「うるさいと」と怒ってもなかなか静かにならない先生と前に立つだけで不思議と子どもが話を止める先生がいます。すーっと静かにさせる先生は別に怒るわけではなく、前に静かに立つだけで子どもたちも静かになる。まさにそれはその先生がもつ人間力なんだと思います。そこにいるだけで尊敬されるというのでしょうか。教職員に限らずどの仕事も一緒だと思いますが、どの世界においても活躍をしている人は「人間力」のある人、人間として魅力のある人だと思います。教職員になれるのは一握りの大人だけです。ぜひこの教職員という仕事に誇りをもって、「人間力」をこれからどんどん高めていただいて、子どもたちを導いてほしいと思います。

最後に、私の大好きな物理学者アルベルト・アインシュタインの言葉を贈ります。彼は、『晩年に想(おも)う』という著書の中で「教育とは、学校で習ったことをすべて忘れてしまった後に、自分の中に残るものをいう。」と述べています。このことは、学校で知識や技能を身に付けることも大切ですが、社会が直面するさまざまな問題に対応し、解決するために、自ら考え行動できる力を育てることが教育の目的であるということではないかと思います。卒業後に社会へ出た時にも学んでいける姿勢や意欲を身に付けさせるのが教職員の仕事であると思います。

たくさんのお話をしましたが、その責任の重さを強く感じるあまり、教職員として勤めることに不安にならないでください。安心してチーム奈良県の一員になってほしいと思います。困ったときには、私も含めて、教職員の先輩が必ず助けをくれると思います。ともに本県教育に携わる仲間として、自分の資質能力の向上に自ら努めていただき、どうか健康にはくれぐれも気を付けて、奈良県の教職員として第一歩を踏み出してほしいと思います。どうもありがとうございました。